影

芥川龍之介

横浜。

日華洋行の主人陳彩は、机に背広の両肘を凭せて、火の消えた葉巻を啣えたまま、今日も堆い商用書類に、繁忙な眼を曝していた。

更紗の窓掛けを垂れた部屋の内には、不相変残暑の寂寞が、息苦しいくらい支配していた。その寂寞を破るものは、ニスの匂のする戸の向うから、時々ここへ聞えて来る、かすかなタイプライタアの音だけであった。

書類が一山片づいた後、陳はふと何か思い出したように、卓上電話の受話器を耳へ当てた。

「私の家へかけてくれ給え。」
陳の唇を洩れる言葉は、妙に底力のある日本語であった。

「誰？――婆や？――奥さんにちょいと出て貰ってくれ。――房子かい？――私は今夜東京へ行くからね、――ああ、向うへ泊って来る。――帰れないか？――とても汽車に間に合うまい。――じゃ頼むよ。――何？　医者に来て貰った？――それは神経衰弱に違いないさ。よろしい。さようなら。」

陳は受話器を元の位置に戻すと、なぜか顔を曇らせながら、肥った指に燐寸を摺って、啣えていた葉巻を

吸い始めた。

……煙草の煙、草花の匂（におい）、ナイフやフォオクの皿に触れる音、部屋の隅から湧き上（のぼ）る調子外（はず）れのカルメンの音楽、――陳はそう云う騒ぎの中に、一杯の麦酒（ビール）を前にしながら、たった一人茫然と、卓（テーブル）に肘をついている。彼の周囲にあるものは、客も、給仕も、煽風機も、何一つ目まぐるしく動いていないものはない。が、ただ、彼の視線だけは、帳場机の後の女の顔へ、さっきからじっと注がれている。

女はまだ見た所、二十（はたち）を越えてもいないらしい。それが壁へ貼った鏡を後に、絶えず鉛筆を動かしながら、

忙(せわ)しそうにビルを書いている。額の捲(ま)き毛、かすかな頬紅(ほおべに)、それから地味な青磁色(せいじいろ)の半襟。——

陳は麦酒(ビール)を飲み干すと、徐(おもむろ)に大きな体を起して、帳場机の前へ歩み寄った。

「陳さん。いつ私に指環を買って下すって？」

女はこう云う間にも、依然として鉛筆を動かしている。

「その指環がなくなったら。」

陳は小銭(こぜに)を探りながら、女の指へ頤(あご)を向けた。そこにはすでに二年前から、延べの金(きん)の両端(りょうはし)を抱(だ)かせた、約婚の指環が嵌(はま)っている。

「じゃ今夜買って頂戴。」
女は咄嗟に指環を抜くと、ビルと一しょに彼の前へ投げた。
「これは護身用の指環なのよ。」
カッフェの外のアスファルトには、涼しい夏の夜風が流れている。陳は人通りに交りながら、何度も町の空の星を仰いで見た。その星も皆今夜だけは、……
誰かの戸を叩く音が、一年後の現実へ陳彩の心を喚び返した。
「おはいり。」
その声がまだ消えない内に、ニスの匂のする戸が

そっと明くと、顔色の蒼白い書記の今西が、無気味なほど静にはいって来た。

「手紙が参りました。」

黙って頷いた陳の顔には、その上今西に一言も、口を開かせない不機嫌さがあった。今西は冷かに目礼すると、一通の封書を残したまま、また前のように音もなく、戸の向うの部屋へ帰って行った。

戸が今西の後にしまった後、陳は灰皿に葉巻を捨てて、机の上の封書を取上げた。それは白い西洋封筒に、タイプライタアで宛名を打った、格別普通の商用書簡と、変る所のない手紙であった。しかしその手紙を手

にすると同時に、陳の顔には云いようのない嫌悪の情が浮んで来た。

「またか。」

陳は太い眉を顰めながら、忌々しそうに舌打ちをした。が、それにも関らず、靴の踵を机の縁へ当てると、ほとんど輪転椅子の上に仰向けになって、紙切小刀も使わずに封を切った。

「拝啓、貴下の夫人が貞操を守られざるは、再三御忠告……貴下が今日に至るまで、何等断乎たる処置に出でられざるは……されば夫人は旧日の情夫と共に、日夜……日本人にして且珈琲店の給仕女たりし房子夫人

が、……支那人（シナじん）たる貴下のために、万斛（ばんこく）の同情無き能わず候。……今後もし夫人を離婚せられずんば、……貴下は万人の嗤笑（ししょう）する所となるも……微衷不悪（びちゅうあしからず） 御推察……敬白。貴下の忠実なる友より。」

手紙は力なく陳の手から落ちた。

……陳は卓子（テーブル）に倚（よ）りかかりながら、レエスの窓掛けを洩（も）れる夕明りに、女持ちの金時計を眺めている。が、蓋の裏に彫った文字（もじ）は、房子のイニシアルではないらしい。

「これは?」

新婚後まだ何日も経たない房子は、西洋箪笥（たんす）の前に

佇んだまま、卓子越しに夫へ笑顔を送った。
「田中さんが下すったの。御存知じゃなくって？　倉庫会社の——」
卓子の上にはその次に、指環の箱が二つ出て来た。白天鵞絨の蓋を明けると、一つには真珠の、他の一つには土耳古玉の指環がはいっている。
「久米さんに野村さん。」
今度は珊瑚珠の根懸けが出た。
「古風だわね。久保田さんに頂いたのよ。」
その後から——何が出て来ても知らないように、陳はただじっと妻の顔を見ながら、考え深そうにこんな

事を云った。
「これは皆お前の戦利品だね。大事にしなくちゃ済まないよ。」
すると房子は夕明りの中に、もう一度あでやかに笑って見せた。
「ですからあなたの戦利品もね。」
その時は彼も嬉しかった。しかし今は……
陳は身ぶるいを一つすると、机にかけていた両足を下した。それは卓上電話のベルが、突然彼の耳を驚かしたからであった。
「私。――よろしい。――繋いでくれ給え。」

彼は電話に向いながら、苛立（いらだ）たしそうに額の汗を拭った。

「誰？――里見探偵（さとみたんてい）事務所はわかっている。事務所の誰？――吉井（よしい）君？――よろしい。報告は？――何が来ていた？――医者？――それから？――そうかも知れない。――じゃ停車場（ていしゃば）へ来ていてくれ給え。――いや、終列車にはきっと帰るから。――間違わないように。さようなら。」

受話器を置いた陳彩（ちんさい）は、まるで放心したように、しばらくは黙然（もくねん）と坐っていた。が、やがて置き時計の針を見ると、半ば機械的にベルの鈕（ボタン）を押した。

書記の今西はその響(ひびき)に応じて、心もち明(あ)けた戸の後から、痩(や)せた半身をさし延ばした。
「今西君。鄭(てい)君にそう云ってくれ給え。今夜はどうか私の代りに、東京へ御出(おい)でを願いますと。」
陳の声はいつの間にか、力のある調子を失っていた。今西はしかし例の通り、冷然と目礼を送ったまま、すぐに戸の向うへ隠れてしまった。
その内に更紗(さらさ)の窓掛けへ、おいおい当って来た薄曇りの西日が、この部屋の中の光線に、どんよりした赤味を加え始めた。と同時に大きな蠅(はえ)が一匹、どこからここへ紛(まぎ)れこんだか、鈍(にぶ)い羽音(はおと)を立てながら、ぼんや

り頬杖(ほおづえ)をついた陳のまわりに、不規則な円を描(えが)き始めた。…………

鎌倉(かまくら)。

陳彩(ちんさい)の家の客間にも、レエスの窓掛けを垂れた窓の内には、晩夏(おそなつ)の日の暮が近づいて来た。しかし日の光は消えたものの、窓掛けの向うに煙っている、まだ花盛りの夾竹桃(きょうちくとう)は、この涼しそうな部屋の空気に、快い明るさを漂(ただよ)わしていた。

壁際(かべぎわ)の籐椅子(とういす)に倚(よ)った房子(ふさこ)は、膝の三毛猫(みけねこ)をさすりながら、その窓の外の夾竹桃へ、物憂(ものう)そうな視線を遊

ばせていた。
「旦那様（だんなさま）は今晩も御帰りにならないのでございますか？」
これはその側の卓子（テーブル）の上に、紅茶の道具を片づけている召使いの老女の言葉であった。
「ああ、今夜もまた寂しいわね。」
「せめて奥様が御病気でないと、心丈夫でございますけれども――」
「それでも私の病気はね、ただ神経が疲れているのだって、今日も山内（やまのうち）先生がそうおっしゃったわ。二三日よく眠りさえすれば、――あら。」

老女は驚いた眼を主人へ挙げた。すると子供らしい房子の顔には、なぜか今までにない恐怖の色が、ありありと瞳（ひとみ）に漲（みなぎ）っていた。

「どう遊ばしました？　奥様。」

「いいえ、何でもないのよ。何でもないのだけれど、——」

房子は無理に微笑しようとした。

「誰か今あすこの窓から、そっとこの部屋の中を、——」

しかし老女が一瞬の後に、その窓から外を覗（のぞ）いた時には、ただ微風に戦（そよ）いでいる夾竹桃の植込みが、人気（ひとけ）

のない庭の芝原を透かして見せただけであった。
「まあ、気味の悪い。きっとまた御隣の別荘の坊ちゃんが、悪戯をなすったのでございますよ。」
「いいえ、御隣の坊ちゃんなんぞじゃなくってよ。何だか見た事があるような——そうそう、いつか婆やと長谷へ行った時に、私たちの後をついて来た、あの鳥打帽をかぶっている、若い人のような気がするわ。それとも——私の気のせいだったかしら。」
　房子は何か考えるように、ゆっくり最後の言葉を云った。
「もしあの男でしたら、どう致しましょう。旦那様は

お帰りになりませんし、――何なら爺(じい)やでも警察へ、そう申しにやって見ましょうか。」

「まあ、婆やは臆病ね。あの人なんぞ何人来たって、私はちっとも怖(こわ)くないわ。けれどももし――もし私の気のせいだったら――」

老女は不審(ふしん)そうに瞬(まばた)きをした。

「もし私の気のせいだったら、私はこのまま気違(きちがい)になるかも知れないわね。」

「奥様はまあ、御冗談(ごじょうだん)ばっかり。」

老女は安心したように微笑しながら、また紅茶の道具を始末し始めた。

「いいえ、婆やは知らないからだわ。私はこの頃一人でいるとね、きっと誰かが私の後に立っているような気がするのよ。立って、そうして私の方をじっと見つめているような――」

房子はこう云いかけたまま、彼女自身の言葉に引き入れられたのか、急に憂鬱（ゆううつ）な眼つきになった。

……電燈を消した二階の寝室には、かすかな香水の匂（におい）のする薄暗がりが拡がっている。ただ窓掛けを引かない窓だけが、ぼんやり明（あか）るんで見えるのは、月が出ているからに違いない。現にその光を浴びた房子は、独り窓の側に佇（たたず）みながら、眼の下の松林を眺めている。

夫は今夜も帰って来ない。召使いたちはすでに寝静まった。窓の外に見える庭の月夜も、ひっそりと風を落している。その中に鈍い物音が、間遠に低く聞えるのは、今でも海が鳴っているらしい。

房子はしばらく立ち続けていた。すると次第に不思議な感覚が、彼女の心に目ざめて来た。それは誰かが後にいて、じっとその視線を彼女の上に集注しているような心もちである。

が、寝室の中には彼女のほかに、誰も人のいる理由はない。もしいるとすれば、――いや、戸には寝る前に、ちゃんと錠が下してある。ではこんな気がする

のは、――そうだ。きっと神経が疲れているからに相違ない。彼女は薄明い松林を見下しながら、何度もこう考え直そうとした。しかし誰かが見守っていると云う感じは、いくら一生懸命に打ち消して見ても、だんだん強くなるばかりである。

房子はとうとう思い切って、怖わ怖わ後を振り返って見た。が、果して寝室の中には、飼い馴れた三毛猫の姿さえ見えない。やはり人がいるような気がしたのは、病的な神経の仕業であった。――と思ったのはしかし言葉通り、ほんの一瞬の間だけである。房子はすぐにまた前の通り、何か眼に見えない物が、この部屋

を満たした薄暗がりのどこかに、潜(ひそ)んでいるような心もちがした。しかし以前よりさらに堪えられない事には、今度はその何物かの眼が、窓を後にした房子の顔へ、まともに視線を焼きつけている。

房子は全身の戦慄(せんりつ)と闘いながら、手近の壁へ手をのばすと、咄嗟(とっさ)に電燈のスウィッチを捻(ひね)った。と同時に見慣れた寝室は、月明りに交(まじ)った薄暗がりを払って、頼もしい現実へ飛び移った。寝台(しんだい)、西洋幮(せいようがや)、洗面台、――今はすべてが昼のような光の中に、嬉しいほどはっきり浮き上っている。その上それが何一つ、彼女が陳と結婚した一年以前と変っていない。こう云う幸

福な周囲を見れば、どんなに気味の悪い幻（まぼろし）も、——いや、しかし怪しい何物かは、眩（まぶ）しい電燈の光にも恐れず、寸刻もたゆまない凝視の眼を房子の顔に注いでいる。彼女は両手に顔を隠すが早いか、無我夢中に叫ぼうとした。が、なぜか声が立たない。その時彼女の心の上には、あらゆる経験を超越した恐怖が、……

　房子は一週間以前の記憶から、吐息（といき）と一しょに解放された。その拍子に膝（ひざ）の三毛猫は、彼女の膝を飛び下りると、毛並みの美しい背を高くして、快さそうに欠伸（あくび）をした。

「そんな気は誰でも致すものでございますよ。爺（じい）やな

どはいつぞや御庭の松へ、鋏（はさみ）をかけて居りましたら、まっ昼間（ぴるま）空に大勢の子供の笑い声が致したとか、そう申して居りました。それでもあの通り気が違う所か、御用の暇には私へ小言（こごと）ばかり申して居るじゃございませんか。」

老女は紅茶の盆（ぼん）を擡（もた）げながら、子供を慰めるようにこう云った。それを聞くと房子の頬（ほお）には、始めて微笑らしい影がさした。

「それこそ御隣の坊ちゃんが、おいたをなすったのに違いないわ。そんな事にびっくりするようじゃ、爺やもやっぱり臆病なのね。――あら、おしゃべりをして

いる内に、とうとう日が暮れてしまった。今夜は旦那様が御帰りにならないから、好いようなものだけれど、——御湯は？　婆や。」
「もうよろしゅうございますとも。何ならちょいと私が御加減を見て参りましょうか。」
「好いわ。すぐにはいるから。」
房子はようやく気軽そうに、壁側の籐椅子から身を起した。
「また今夜も御隣の坊ちゃんたちは、花火を御揚げなさるかしら。」
老女が房子の後から、静に出て行ってしまった跡に

は、もう夾竹桃も見えなくなった、薄暗い空虚の客間が残った。すると二人に忘れられた、あの小さな三毛猫は、急に何か見つけたように、一飛びに戸口へ飛んで行った。そうしてまるで誰かの足に、体を摺(す)りつけるような身ぶりをした。が、部屋に拡がった暮色の中には、その三毛猫の二つの眼が、無気味な燐光(りんこう)を放つほかに、何もいるようなけはいは見えなかった。…………

横浜。

日華洋行(にっかようこう)の宿直室には、長椅子(ながいす)に寝ころんだ書記の

今西（いまにし）が、余り明くない電燈の下に、新刊の雑誌を拡（ひろ）げていた。が、やがて手近の卓子（テーブル）の上へ、その雑誌をばたりと抛（なげ）ると、大事そうに上衣（うわぎ）の隠しから、一枚の写真をとり出した。そうしてそれを眺めながら、蒼白い頰にいつまでも、幸福らしい微笑を浮べていた。

写真は陳彩（ちんさい）の妻の房子（ふさこ）が、桃割（ももわ）れに結（ゆ）った半身であった。

鎌倉。

下（くだ）り終列車の笛が、星月夜の空に上（のぼ）った時、改札口を出た陳彩（ちんさい）は、たった一人跡に残って、二つ折の鞄（かばん）を

抱えたまま、寂しい構内を眺めまわした。すると電燈の薄暗い壁側(かべぎわ)のベンチに坐っていた、背の高い背広の男が一人、太い籐(とう)の杖(つえ)を引きずりながら、のそのそ陳の側へ歩み寄った。そうして闊達(かったつ)に鳥打帽を脱ぐと、声だけは低く挨拶(あいさつ)をした。

「陳さんですか？　私は吉井(よしい)です。」

陳はほとんど無表情に、じろりと相手の顔を眺めた。

「今日(こんにち)は御苦労でした。」

「先ほど電話をかけましたが、――」

「その後(ご)何もなかったですか？」

陳の語気には、相手の言葉を弾(はじ)き除(の)けるような力が

あった。
「何もありません。奥さんは医者が帰ってしまうと、日暮までは婆やを相手に、何か話して御出ででした。それから御湯や御食事をすませて、十時頃までは蓄音機(ちくおんき)を御聞きになっていたようです。」
「客は一人も来なかったですか？」
「ええ、一人も。」
「君が監視をやめたのは？」
「十一時二十分です。」
吉井の返答(ことば)もてきぱきしていた。
「その後(ご)終列車まで汽車はないですね。」

「ありません。上(のぼ)りも、下(くだ)りも。」

「いや、難有(ありがと)う。帰ったら里見(さとみ)君に、よろしく云ってくれ給え。」

陳は麦藁帽(むぎわらぼう)の庇(ひさし)へ手をやると、吉井が鳥打帽を脱ぐのには眼もかけず、砂利を敷いた構外へ大股(おおまた)に歩み出した。その容子(ようす)が余り無遠慮(ぶえんりょ)すぎたせいか、吉井は陳の後姿(うしろすがた)を見送ったなり、ちょいと両肩を聳(そび)やかせた。が、すぐまた気にも止めないように、軽快な口笛を鳴らしながら、停車場(ていしゃば)前の宿屋の方へ、太い籐の杖を引きずって行った。

鎌倉。

一時間の後陳彩（のちちんさい）は、彼等夫婦の寝室の戸へ、盗賊（とうぞく）のように耳を当てながら、じっと容子を窺（うかが）っている彼自身を発見した。寝室の外の廊下には、息のつまるような暗闇が、一面にあたりを封じていた。その中（うち）にただ一点、かすかな明りが見えるのは、戸の向うの電燈の光が、鍵穴（かぎあな）を洩れるそれであった。

陳はほとんど破裂しそうな心臓の鼓動（こどう）を抑えながら、ぴったり戸へ当てた耳に、全身の注意を集めていた。が、寝室の中からは何の話し声も聞えなかった。その沈黙がまた陳にとっては、一層堪え難い呵責（かしゃく）であった。

彼は目の前の暗闇の底に、停車場からここへ来る途中の、思いがけない出来事が、もう一度はっきり見えるような気がした。

……枝を交(かわ)した松の下には、しっとり砂に露の下りた、細い路が続いている。大空に澄んだ無数の星も、その松の枝の重(かさ)なったここへは、滅多(めった)に光を落して来ない。が、海の近い事は、疎(まばら)な芒(すすき)に流れて来る潮風(しおかぜ)が明かに語っている。陳はさっきからたった一人、夜(よ)と共に強くなった松脂(まつやに)の匂(におい)を嗅ぎながら、こう云う寂しい闇の中に、注意深い歩みを運んでいた。

その内に彼はふと足を止めると、不審そうに行く手

を透(す)かして見た。それは彼の家の煉瓦塀(れんがべい)が、何歩か先に黒々と、現われて来たからばかりではない、その常春藤(きづた)に蔽(おお)われた、古風な塀の見えるあたりに、忍びやかな靴の音が、突然聞え出したからである。

が、いくら透(すか)して見ても、松や芭の闇が深いせいか、肝腎(かんじん)の姿は見る事が出来ない。ただ、咄嗟(とっさ)に感づいたのは、その足音がこちらへ来ずに、向うへ行くらしいと云う事である。

「莫迦(ばか)な、この路を歩く資格は、おればかりにある訳じゃあるまいし。」

　陳はこう心の中に、早くも疑惑を抱き出した彼自身

を叱ろうとした。が、この路は彼の家の裏門の前へ出るほかには、どこへも通じていない筈である。して見れば、——と思う刹那に陳の耳には、その裏門の戸の開く音が、折から流れて来た潮風と一しょに、かすかながらも伝わって来た。

「可笑しいぞ。あの裏門には今朝見た時も、錠がかかっていた筈だが。」

　そう思うと共に陳彩は、獲物を見つけた猟犬のように、油断なくあたりへ気を配りながら、そっとその裏門の前へ歩み寄った。が、裏門の戸はしまっている。力一ぱい押して見ても、動きそうな気色も見えないの

は、いつの間にか元の通り、錠が下りてしまったらしい。陳はその戸に倚りかかりながら、膝を埋めた芒の中に、しばらくは茫然と佇んでいた。

「門が明くような音がしたのは、おれの耳の迷だったかしら。」

が、さっきの足音は、もうどこからも聞えて来ない。常春藤の簇った塀の上には、火の光もささない彼の家が、ひっそりと星空に聳えている。すると陳の心には、急に悲しさがこみ上げて来た。何がそんなに悲しかったか、それは彼自身にもはっきりしない。ただそこに佇んだまま、乏しい虫の音に聞き入っていると、

自然と涙が彼の頬へ、冷やかに流れ始めたのである。
「房子。」
陳はほとんど呻くように、なつかしい妻の名前を呼んだ。
するとその途端である。高い二階の室の一つには、意外にも眩しい電燈がともった。
「あの窓は、――あれは、――」
陳は際どい息を呑んで、手近の松の幹を捉えながら、延び上るように二階の窓を見上げた。窓は、――二階の寝室の窓は、硝子戸をすっかり明け放った向うに、明るい室内を覗かせている。そうしてそこから流れる

光が、塀の内に茂った松の梢を、ぼんやり暗い空に漂わせている。

しかし不思議はそればかりではない。やがてその二階の窓際には、こちらへ向いたらしい人影が一つ、朧げな輪廓を浮き上らせた。生憎電燈の光が後にあるから、顔かたちは誰だか判然しない。が、ともかくもその姿が、女でない事だけは確かである。陳は思わず塀の常春藤を摑んで、倒れかかる体を支えながら、苦しそうに切れ切れな声を洩らした。

「あの手紙は、――まさか、――房子だけは――」

一瞬間の後陳彩は、安々塀を乗り越えると、庭の松

の間をくぐりくぐり、首尾(しゅび)よく二階の真下にある、客間の窓際へ忍び寄った。そこには花も葉も露に濡れた、水々しい夾竹桃(きょうちくとう)の一むらが、……

陳はまっ暗な外の廊下(ろうか)に、乾いた唇を噛みながら、一層嫉妬(しっと)深い聞き耳を立てた。それはこの時戸の向うに、さっき彼が聞いたような、用心深い靴の音が、二三度床(ゆか)に響(ひび)いたからであった。

足響(あしおと)はすぐに消えてしまった。が、興奮した陳の神経には、ほどなく窓をしめる音が、鼓膜(こまく)を刺すように聞えて来た。その後には、――また長い沈黙があった。

その沈黙はたちまち絞(し)め木(ぎ)のように、色を失った陳

の額へ、冷たい脂汗を絞り出した。彼はわなわな震える手に、戸のノッブを探り当てた。が、戸に錠の下りている事は、すぐにそのノッブが教えてくれた。すると今度は櫛かピンかが、突然ばたりと落ちる音が聞えた。しかしそれを拾い上げる音は、いくら耳を澄ましていても、なぜか陳には聞えなかった。

こう云う物音は一つ一つ、文字通り陳の心臓を打った。陳はその度に身を震わせながら、それでも耳だけは剛情にも、じっと寝室の戸へ押しつけていた。しかし彼の興奮が極度に達している事は、時々彼があたりへ投げる、気違いじみた視線にも明かであった。

苦しい何秒かが過ぎた後、戸の向うからはかすかながら、ため息をつく声が聞えて来た。と思うとすぐに寝台の上へも、誰かが静に上ったようであった。

もしこんな状態が、もう一分続いたなら、陳は戸の前に立ちすくんだまま、失心してしまったかも知れなかった。が、この時戸から洩れる蜘蛛の糸ほどの朧げな光が、天啓のように彼の眼を捉えた。陳は咄嗟に床へ這うと、ノッブの下にある鍵穴から、食い入るような視線を室内へ送った。

その刹那に陳の眼の前には、永久に呪わしい光景が開けた。…………

横浜。

書記の今西は内隠しへ、房子の写真を還してしまうと、静に長椅子から立ち上った。そうして例の通り音もなく、まっ暗な次の間へはいって行った。

スウィッチを捻る音と共に、次の間はすぐに明くなった。その部屋の卓上電燈の光は、いつの間にそこへ坐ったか、タイプライタアに向っている今西の姿を照し出した。

今西の指はたちまちの内に、目まぐるしい運動を続け出した。と同時にタイプライタアは、休みない響を

刻(きざ)みながら、何行かの文字(もじ)が断続した一枚の紙を吐き始めた。

「拝啓、貴下の夫人が貞操を守られざるは、この上なおも申上ぐべき必要無き事と存じ候。されど貴下は溺愛の余り……」

今西の顔はこの瞬間、憎悪(ぞうお)そのもののマスクであった。

鎌倉。

陳(ちん)の寝室の戸は破れていた。が、その外(ほか)は寝台も、西洋蟵(せいようがや)も、洗面台も、それから明るい電燈の光も、こ

とごとく一瞬間以前と同じであった。

陳彩は部屋の隅に佇んだまま、寝台の前に伏し重なった、二人の姿を眺めていた。その一人は房子であった。——と云うよりもむしろさっきまでは、房子だった「物」であった。この顔中紫に腫れ上った「物」は、半ば舌を吐いたまま、薄眼に天井を見つめていた。もう一人は陳彩であった。部屋の隅にいる陳彩と、寸分も変らない陳彩であった。これは房子だった「物」に重なりながら、爪も見えないほど相手の喉に、両手の指を埋めていた。そうしてその露わな乳房の上に、生死もわからない頭を凭せていた。

何分かの沈黙が過ぎた後（のち）、床（ゆか）の上の陳彩は、まだ苦しそうに喘（あえ）ぎながら、徐（おもむろ）に肥（ふと）った体を起した。が、やっと体を起したと思うと、すぐまた側にある椅子（いす）の上へ、倒れるように腰を下してしまった。

その時部屋の隅にいる陳彩は、静に壁際を離れながら、房子だった「物」の側に歩み寄った。そうしてその紫に腫上（はれあが）った顔へ、限りなく悲しそうな眼を落した。

椅子の上の陳彩は、彼以外の存在に気がつくが早いか、気違いのように椅子から立ち上った。彼の顔には、——血走った眼の中には、凄まじい殺意が閃（ひらめ）いていた。が、相手の姿を一目見るとその殺意は見る見る内に、

云いようのない恐怖に変って行った。
「誰だ、お前は？」
彼は椅子の前に立ちすくんだまま、息のつまりそうな声を出した。
「さっき松林の中を歩いていたのも、——裏門からそっと忍びこんだのも、——この窓際に立って外を見ていたのも、——おれの妻を、——房子を——」
彼の言葉は一度途絶えてから、また荒々しい嗄(しわが)れ声になった。
「お前だろう。誰だ、お前は？」
もう一人の陳彩は、しかし何とも答えなかった。そ

の代りに眼を挙げて、悲しそうに相手の陳彩を眺めた。すると椅子の前の陳彩は、この視線に射すくまされたように、無気味（ぶきみ）なほど大きな眼をしながら、だんだん壁際の方へすさり始めた。が、その間も彼の唇（くちびる）は、「誰だ、お前は？」を繰返すように、時々声もなく動いていた。

その内にもう一人の陳彩は、房子だった「物」の側に跪（ひざまず）くと、そっとその細い頸（くび）へ手を廻した。それから頸に残っている、無残な指の痕（あと）に唇を当てた。

明い電燈の光に満ちた、墓窖（はかあな）よりも静な寝室の中には、やがてかすかな泣き声が、途切れ途切れ（とぎ）に聞え出

した。見るとここにいる二人の陳彩は、壁際に立った陳彩も、床に跪いた陳彩のように、両手に顔を埋めながら……

東京。

突然『影』の映画が消えた時、私は一人の女と一しょに、ある活動写真館のボックスの椅子に坐っていた。

「今の写真はもうすんだのかしら。」

女は憂鬱な眼を私に向けた。それが私には『影』の中の房子の眼を思い出させた。

「どの写真？」

「今のさ。『影』と云うのだろう。」

女は無言のまま、膝の上のプログラムを私に渡してくれた。が、それにはどこを探しても、『影』と云う標題は見当らなかった。

「するとおれは夢を見ていたのかな。それにしても眠った覚えのないのは妙じゃないか。おまけにその『影』と云うのが妙な写真でね。——」

私は手短かに『影』の梗概（こうがい）を話した。

「その写真なら、私も見た事があるわ。」

私が話し終った時、女は寂しい眼の底に微笑の色を動かしながら、ほとんど聞えないようにこう返事をし

た。

「お互に『影』なんぞは、気にしないようにしましょうね。」

（大正九年七月十四日）

底本：「芥川龍之介全集４」ちくま文庫、筑摩書房
１９８７（昭和62）年１月27日第１刷発行
１９９６（平成８）年７月15日第８刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月〜１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：もりみつじゅんじ
１９９９年３月１日公開
２００４年３月８日修正